学内広報

2024.8.26 no.1585

トコロチャシ跡遺跡から出土したオホーツク文化のクマ骨偶

精緻で優美なクマの全身像

→p.4

資金運用の現況をCIOに聞いてみた

UTokyo Brand Studioを開設

常呂実習施設設置50周年!

150周年カウントダウンイベント「民主主義と東京大学」を開催

福島CIO（Chief Investment Officer）に

東大の資金運用の現況を聞いてみた

上智大学新聞学科卒業、コロンビア大学大学院修了。ドイチェ信託銀行常務執行役CIO、明治安田アセットマネジメント執行役CIO、ブラックロックジャパン取締役CIO等を経て昨年4月より現職。

先般、東大基金は寄付金40億円のうち10億円損失を出していると綴るSNSが話題になりました。2022年度の報告書を見ると確かにそう読める記載があり、構成員としても不安になってしまいます。そこで、昨年4月から本学初のCIOを務める福島執行役に、実際の状況はどうなっているのか、解説をお願いしました。結論。不安を抱く必要はありません。

運用で重要なのは額より収益率

まず、2022年は株も債券も世界全体で大きく下がった年で、東大に限らず多くの機関の運用でマイナスが出ていました。また、運用で注目すべきは金額よりも収益率です。この年の収益率はマイナス0.76%。これは相対的にはいい数字でした。本来なら3〜4%のマイナスでもおかしくないところをリスク分散で粘った結果と言えます。累積ベースで見れば、東大の運用は順調だとわかります。ポートフォリオ変更前の目標だった年間3.5%を上回る収益率を続けており、23年度は11.57%と非常に高い数字です。株高と円安の追い風が吹き、収益の蓄積ができたので、中長期的に5%を達成できる可能性が高まりました。

各部局で受け入れた寄付金の運用についても高度化ポートフォリオへの移行を進め、23年4月に約110億円で始めた高度化運用は現在約300億円に成長しています。目指すのは収益率年5%の運用。そこに新たな寄付金を加えて大きくした上で、研究資金、奨学金、教員の給与といったアカデミック・ウェルビーイングの向上に使う。中長期で5%リターンを達成することと、全体の分母を大きくすることの両方が重要です。

「東京大学基金活動報告書2023」より

◉東京大学の寄付金運用実績

	2023年度 総合収益	収益率	2022年度 総合収益	収益率
高度化ポートフォリオ（東大基金・部局寄付金）	2,215,717千円	11.57%	-66,571千円	-0.76%
債券運用等（部局寄付金）	-240,941千円	-0.96%	-955,521千円	-4.02%
合計	1,974,775千円	8.15%	-1,022,093千円	-2.93%

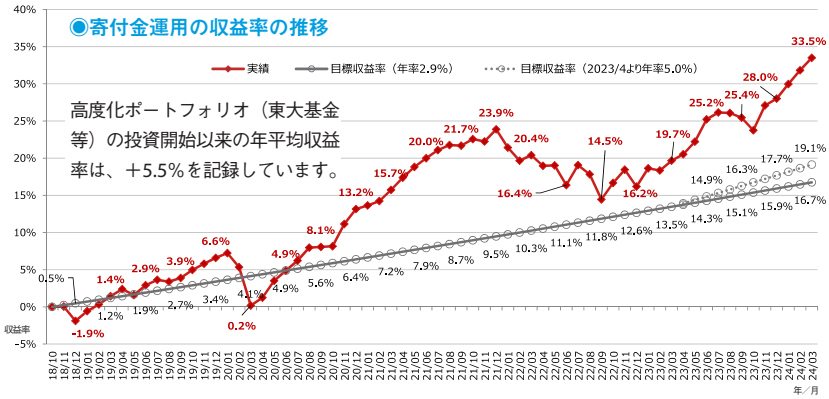
ただ、5%は非常に高い目標です。達成のためにはリスクを取らないといけません。オルタナティブの中の非流動資産への投資でリスクを取る方針を立て、基本ポートフォリオではオルタナティブの比率を従来の2割から6割に上げました。上場株式や債券のようにいつでも売買可能ではない代替資産で、非上場の株式もここに入ります。

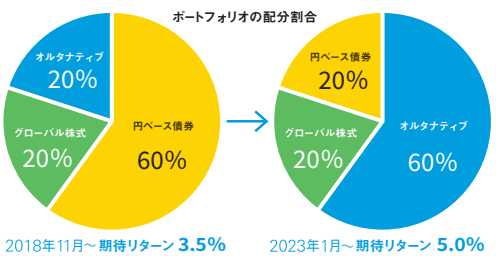
この方針自体は執行部と財務部が決めたもので、その実装者として呼ばれたのが私です。海外ではイェール大学がこのやり方で成功していますが、日本の大学はまだどこもやっていません。東大が実装する意義は大きいと思ってCIOを引き受けました。

運用会社から想定以上の反響が

東大の運用資産は業界のなかで見れば小さい金額です。あまり相手にしてもらえないのではないかと当初は思いましたが、東大の将来性と本気度を理解した多くの運用会社が関心を寄せ、最初の1年で70ものファンドがプレゼンに来てくれた。これはポジティブな驚きでした。一方で、国立大学法人の独特な会計制度は少し戸惑った部分です。通常のやり方が通用せず、運用の支障になる部分もあると感じました。そこは財務部と相談して対応しています。

国の支援に頼れない時代です。将来のアカデミック・ウェルビーイングのためには、基金を増やして運用益を活用することがさらに重要になります。運用益を大学をよくすることに使えば、将来の学生にとって必ずプラスになります。近年では日本でも、運用の専門家がCIOに就任したり、オルタナティブの比率を上げたりと、資金運用に本腰を入れる大学が出てきました。大学の仲間として連携しつつ、東大には東大にしかできない役割もあるはず。ディファレンシエイターになることを意識しながら、5%の収益率の達成を目指します。批判的な目もあるでしょうが、注目されるのは東大の宿命。気にされなくなったら終わりです。





2018年11月〜 期待リターン 3.5%　　2023年1月〜 期待リターン 5.0%

オルタナティブには、プライベート・エクイティ（非上場株式）、不動産、プライベートデット（私的貸出）、ヘッジファンドが含まれます。「150周年を迎える2027年までに運用資産額を1000億円にしたいと思っています」（福島）

東京大学のイメージをアップデートするために

UTokyo Brand Studioを開設しました

岩村水樹理事のもと2021年度に発足したコミュニケーションチーム（CTeam）は、大学→社会の一方的な広報から大学⇄社会の双方向コミュニケーションへの移行を検討してきました。そして7月に開設したのが、ブランドスタジオです。コミュニケーション戦略推進担当の執行役としてCTeamの舵を取り、初代スタジオ長を務める河村知彦先生に、組織の概要と展望を紹介してもらいました。

全学で一貫性のある発信を

国内ではすでに東大ブランドがありますが、それが私たちの特徴を正しく伝えているかというと、疑問です。頭でっかちとか受験の最高峰といった画一的なイメージも根強いようです。実際は多様性の幅が大きく、社会に貢献する活動も多いのに、その部分はあまり伝わっていません。他方、国外では東大は存在すら十分知られておらず、ゼロからブランドを育てる必要があります。

ブランドスタジオは、正しい東大ブランドを浸透させる仕組みを作り、組織として一貫性のあるコミュニケーション活動を進めるための組織です。具体的に行うのは、まずはコミュニケーション手法の企画や制作に関するコンサルティング。写真やデザイン素材などのアセットを学内に提供し、学外の専門人材ネットワークと学内をつなげる役割を果たします。デザインに関する構成員向け講演会の開催など、学びの機会の提供や人材育成も重要な任務です。

組織構成としては、専門人材連携部門（Creator Lab）と学生協働制作部門（Student Lab）を置き、学外から招聘する専門人材が前者を、広報室副室長の渡邉英徳先生（情報学環）が後者を率います。Student Labではまず渡邉研究室を中心に、デザインに興味のある学生を集めて活動を始めます。特別教授の山中俊治先生、Takram Japanの田川欣也さんをはじめ、複数のスーパーバイザーが加わる予定です。

従来は各部局・部署がさまざまな制作物を発信してきましたが、各々が自律的に動いた結果、一貫性のある見え方にはならなかった面もあると思います。大学にはもちろん多様性が重要ですが、ブランドスタジオは従来足りなかった、一貫性をもって発信する点に集中しています。各部局・部署の制作物を同じデザイナーに統一しようというわけではありません。大学の目指す方向性を認識した上での発信を心がけてもらいたいということ。そのための仕組みを整えるのが、来年度発足のコミュニケーション戦略本部（仮称）とブランドスタジオです。

とはいえ、いまはまだ検証フェーズです。学内のニーズを把握するため、UTokyo Portalの便利帳に相談フォームを用意しました。ポスターを作りたい、きれいな写真を撮りたい、ロゴを作りたいなど、皆さんの声を聞かせてください。たとえば、部局のポスターが一見して東大の組織のものであると伝わることは、全学の一体感を高めることにつながるのではないでしょうか。

2025年度には実装フェーズに移り、学生や学外のメンバーも加えて体制を整え、コンサルタント業務に制作対応を加えます。2026年度以降の発展フェーズでは、企業協賛プログラムなどを含めた収益化も模索します。たとえば、ブランドスタジオ経由だと通常よりリーズナブルに制作できるなど、統一的な発信と同時に金銭面の効率化も図れると理想的ですが……。

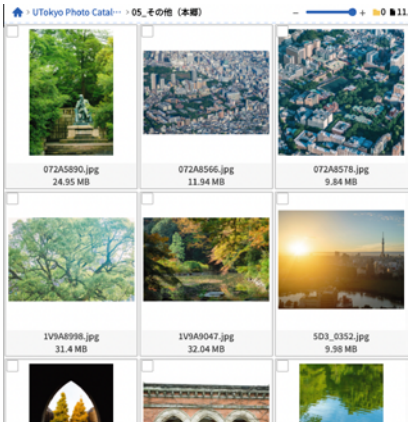
これは東大ブランドを国際的に強化していくための新たな一歩です。まだ小さな一歩ですが、全学の皆さんとともに歩みながら徐々に拡充を進めます。広報関連のリソースが足りない部局・部署の皆さんには特に活用していただきたいと思っています。

ブランドスタジオの中期的戦略

	2024年度：第1段階 検証フェーズ	2025年度：第2段階 実装フェーズ	2026年度以降：第3段階 発展フェーズ
相談窓口を設置・案件ごとのワークフローを試行			
ゴール	ニーズの顕在化 外部リソースのネットワーク化	学内実施体制の強化 外部リソース協業体制検証 ブランドアセットの開発等	収益化を模索 スポンサープログラム展開
マイルストーン	1）ニーズ顕在化のための ヒアリング 2）外部リソースネットワーク化 3）案件ごとのコンサル 4）コミュニケーションに関する 講演会・学びの機会提供	1）コンサル・制作対応 2）外部リソース協業体制の検証 3）ブランドアセットの開発など 4）コミュニケーションに関する 講演会・学びの機会提供	1）コンサル・制作対応 2）外部リソース協業体制の確立 3）ブランドアセット展開 4）企業協賛プログラムの展開 5）コミュニケーションに関する 講演会・学びの機会提供

東大が「世界の誰もが来たくなる大学」になるための機能の一つを担うのがブランドスタジオです。

UTokyo Visual Assets の先行例



UTokyo Portalの便利帳で、赤門、正門、安田講堂、総合図書館などの写真素材を公開しています。

節目のシンポジウム「常呂（ところ）遺跡と列島文化の多様性」を本郷で開催

常呂実習施設設置50周年！

北海道の常呂と東大のご縁の端緒は、言語学の服部四郎先生がアイヌ語の調査で訪れた1955年に遡ります。現地の考古愛好家の熱意を受けて遺跡を訪れた服部先生が考古学の駒井和愛先生に連絡し、現地視察で重要性に気づいた駒井先生は、1957年から発掘調査を開始。調査は連綿と続き、1967年に最初の教員が現地に赴任し、文部省の認可が下りたのが1973年。そこから50年が過ぎたのを機にシンポジウムが企画され、7月6日、会場の国際学術総合研究棟にゆかりの関係者が集いました。

常呂実習施設所蔵のクマ骨偶（トド骨製）

1967年竣工の常呂資料陳列館

●50周年記念書籍
『オホーツクの古代文化』
（新泉社、2024年）

背景写真：ドローンで撮影した史跡常呂遺跡

諸文化が融合した日本列島北辺域

1996年から常呂で活動する熊木俊朗先生は、施設の歴史を4期に分けて紹介しました。1957年～の第1期では、縄文中期の貝塚や擦文文化の住居跡といった代表的な遺跡を発掘し、1964年～の第2期には約3000軒の竪穴の分布調査と地形測量を実施。1971年～の第3期には藤本強先生を中心に擦文文化の研究を推進。1991年～の第4期には、出土したクマの頭骨から見られる集落間格差や擦文文化の儀礼的行為の分析といった研究が進みました。縄文からアイヌに至る変遷を途切れなく捉えることで、道北・道東の考古学研究のモデル拠点として機能してきたのが常呂実習施設です。

考古学研究室の福田正宏先生は、日本列島北辺域を立脚点に国境のない時代の地域史を追う自身の考古学を紹介。東アジア規模の社会経済的変化から、環日本海北部の相似性と多様性、遊動性が高い文化動態との関係性までを捉えることができる常呂の特色を解説しました。亀ヶ岡遺跡から出土した遮光器土偶と同じ文様が常呂で出たシマフクロウの土器にも見られること、遠軽（えんがる）町白滝を中心に産した良質な黒曜石が地域の居住欲を高めたことなど、考古学ファンでない人にも訴求する話が続きました。

常呂実習施設がある「ところ遺跡の森」の所長を務める山田哲さんは、2006年に常呂町などを合併した北見市の基本情報を紹介。続いて、1956年に北大が置戸町で最初の発掘調査をしたこと、1960年代には小中学校の教員が主の北見郷土研究会が発掘調査を行ったが、考古学の作法に則った記録はなされず、遺物がある場所に棒を差して目印にしていたことなど、当地に伝わる逸話を披露しました。史跡常呂遺跡には、文化の多様性、大規模性、自然と竪穴の窪みが一体となる独特の景観的価値がある一方、住民の関心が低く文化財が地域の宝になりにくいという課題も指摘しました。

文化庁で文化財保護に携わってきた近江俊秀さんは、マニアではない大多数の人たちが関心を持たないと遺跡は残しにくいと指摘。牧野富太郎が自叙伝に記した言葉を引き、学問を軸に共通のストーリーを紡ぐ意義を訴えました。文化財の基本的な性質、地域を開発する不動産会社と埋蔵文化財の関係、愛媛大学と連携した「ごっさ弥生の森」の活動や、遺跡復元を道具の調達から腐食まで体験する北杜市梅ノ木遺跡の試みまで、興味深い事例の紹介が続きました。

常呂から送った50年前の絵葉書

ディスカッションでは、学術研究をどう地域に活かすかについて、旧石器時代の考古学が専門の森先一貴先生の司会のもと、登壇者たちが持論を展開。外から来た大学人の指摘が地元に役立つ、歴史は国家視点より地域視点で語るべきだ、常呂の文化や歴史は自分とは何かを考える材料になる、地域の道標を作ることができるのが考古学であり文化財だ……。蓄積型の学問を東大が常呂で続ける意義が強調されました。

最後に登壇したのは、最初の助手として活躍した菊池徹夫先生です。常呂から東京の駒井先生に毎月絵葉書で近況を伝えていた当時を回想した菊池先生は、家で発掘したという2葉を持ってきて披露。大量に収穫した蕗を越冬食糧にすることを記した一文を朗読し、50年前の北の大地の情景を聴衆に想像させながら、4時間に及ぶシンポジウムをしみじみと締めくくりました。

シンポジウム「常呂遺跡と列島文化の多様性」

開会挨拶	**納富信留**　人文社会系研究科長
ビデオ挨拶	**藤井輝夫**　総長
第1部　学術資源がもたらす新たな歴史	
	常呂における発掘調査50年　**熊木俊朗**　人文社会系研究科教授 ❶
	東北アジアから見たオホーツク海沿岸の遺跡群　**福田正宏**　人文社会系研究科准教授 ❷
第2部　学術資源から地域資源へ	
	オホーツク地域における文化財保護 ―― その特性　**山田哲**　北見市教育委員会ところ遺跡の森所長 ❸
	地域の力と文化財保護の持続性　**近江俊秀**　文化庁文化財第二課埋蔵文化部門主任文化財調査官 ❹
ディスカッション	学術研究を地域に活かす モデレーター＝熊木俊朗・**森先一貴** ❺
閉会挨拶	**菊池徹夫**　早稲田大学名誉教授 ❻

第1回150周年カウントダウンイベント

「民主主義と東京大学」を開催

東大の歴史と未来を考える

東大が歩んできた歴史を「民主主義」という切り口から振り返り、未来に向けての役割、使命を考えるという趣旨の今回のイベント。政治学、歴史学、教育学などの視点から、戦後初の東大総長で民主化をリードした南原繁、学生運動、そして現代の選挙運動改革などについて講演を行いました。

150周年記念事業企画調整委員会委員長の津田敦理事・副学長は、開会挨拶の中で、東大の歴史を振り返ることは近代日本の歴史を振り返ることでもあると述べ、このイベントを未来を見つめる機会にもしたいと話しました。津田理事とともに本イベントを企画した政治学の宇野重規先生は、常に問い直されて新しい意味付けを加えられることこそが民主主義だと話し、参加者と一緒に考えたいと述べました。また、東大の学費値上げに関する議論にも触れ、どんな制度が合理的か正直迷いがあると話しました。途中、会場からパレスチナ情勢についての問題提起がなされる場面もありました。

政治学の苅部直先生は、南原繁、そして大正デモクラシーを牽引した法学部教授の吉野作造の功績などを考察。1946年の元旦に天皇人間宣言が出され、日章旗掲揚がタブー視されていたその年の2月11日に、堂々と日の丸を東大正門に掲げ、安田講堂で行われた紀元節の式典が、南原の社会の同調圧力に対するある種の抵抗であったこと。また、大学は権力と切り離された真理の追求の場で、教育は知識を与えるだけではなく豊かな人間性を養うこと。それがひいてはデモクラシーを支える市民の育成につながるという南原の教育構想は、今でも十分振り返る意義があると述べました。

続いて登壇した教育学の小玉重夫先生は、戦後教育と学生の政治的主体化について語りました。戦後2代目の総長を務めた矢内原忠雄の学生運動に対する両義的なスタンスや、医学部ストライキから発展した東大紛争などに言及。主体性を持った学生が多く参加するというフィールドスタディ型政策協働プログラムの意義も紹介しました。

地方議会から日本の政治を変える

最後に登壇したのは2020年10月のつくば市議会議員選挙で当選した川久保皆実さん。街頭演説、選挙カーでの名前連呼といった従来型の選挙運動に疑問を感じ、新しいスタイルで行った選挙活動を紹介。献金に頼らず、後援会も作らず、政策はウェブサイトや動画などで訴えるやり方を全国に広めることで、自分のように幼い子供がいても出馬でき、多様な声が反映される政治を実現できるのではないかと話しました。

南原繁と終戦工作などについて話す予定だった歴史学の加藤陽子先生は、残念ながら体調不良により欠席となったため、メッセージを宇野先生が代読しました。

講演後は3名の登壇者と宇野先生によるパネルディスカッションが行われ、リベラルアーツ・プログラム、教育費用の負担のあり方、権威主義など、参加者から寄せられた多岐にわたる質問に応じました。最後に宇野先生は、「150周年をただ祝うのではなく、東京大学の歴史を批判的に見ながら、では次にどうしていくのかを考える上で、大きなヒントをいただきました」と述べて会の幕をおろしました。

150周年カウントダウンイベントの第2弾は、「スポーツと東京大学」というテーマで、10月19日に開催されます。

カウントダウンイベント「民主主義と東京大学」

開会挨拶	**津田敦**（理事・副学長）
はじめに	**宇野重規**（社会科学研究所長）
報告1	大正・昭和のデモクラシーと大学：吉野作造と南原繁　**苅部直**（法学政治学研究科）
報告2	歴史のなかの東大：敗戦・占領・独立　**加藤陽子**（人文社会系研究科）
報告3	戦後教育と東大：学生の政治的主体化をめぐる可能性と困難　**小玉重夫**（白梅学園大学学長、東京大学客員教授）
報告4	新しい選挙スタイルで地方から政治を変える：東大卒業生の挑戦　**川久保皆実**（つくば市議会議員、弁護士）
パネルディスカッション	
閉会挨拶	津田敦

※加藤陽子先生は体調不良のため当日は欠席。

海と希望の学校 ―震災復興の先へ―

第33回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト――海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み――です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

三陸と奄美の高校生の意外な共通点

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門 准教授
早川 淳

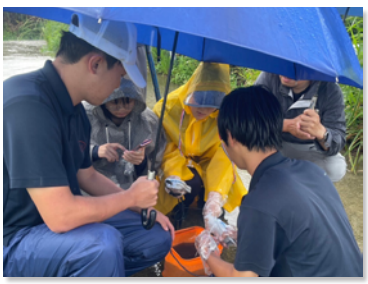
地域連携プロジェクトである“海と希望の学校”では、各地域の将来を担う地元の高校生との連携活動を積極的に行っています。“海と希望の学校 in 三陸”では岩手県沿岸部において、FSI事業“亜熱帯・Kuroshio研究拠点の形成と展開”の“海と希望の学校 in 奄美”では奄美群島において、地域の高校生との連携を行っており、私は両方の活動に携わっています。

緯度にして約10度も離れた両地域では、海洋環境を含めた自然環境が大きく異なります。冬にセーターの上に厚手のコートを着込んで大槌町を出発したら、奄美では昼間は薄手の上着で過ごせたり、奄美の透明度の高いサンゴ礁の海で潜水調査をした翌週に、水温が約12℃低い大槌湾で初夏特有の濁りの中、海藻群落の調査をしたりといったことから、自然環境の差異を肌身に感じているところです。一方で、高校生との連携活動の在り方という点では両地域に多くの共通点があることを私は感じています。高校生が大学での研究に触れること、そして彼らの活動が地域の課題解決につながることへの地域社会の期待が高いことや、地元の皆さんが高校生の活動をサポートしていることは三陸沿岸域でも奄美群島でも同様です。

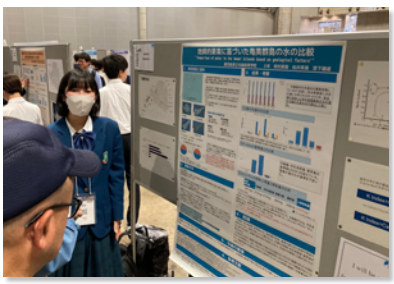
一方、高校生自身がそれほど地元の海のことを知らないということも、どちらも海との密接な関係の中で歩んできた地域であるにも関わらず、共通しています。高校生に「海によく行く？」と聞くと、ほとんどの生徒さんから返ってくるのは「そんなに行かない」といった言葉です。よくよく聞いてみると、夏に海で泳いだり、釣りをしたりといったことはあって、実際には海には行っているのですが、自分たちの目の前にある海が“どんな海なのか？”ということにはそれほど興味が無かったということかもしれません。両地域で研究を行いながら、それぞれの海の“面白さ”を実感している私たちからすると、大変もったいないと感じます。なので、私たちは高校生との活動の中で、海洋環境の多様性と、その中での地元の海の個性を彼ら自身に認識してもらうことを意識しています。

大槌高校はま研究会、漂着物班の吉里吉里海岸でのサンプリングの様子。“レア”な漂着物が見つかると現場で鑑定会が始まります。

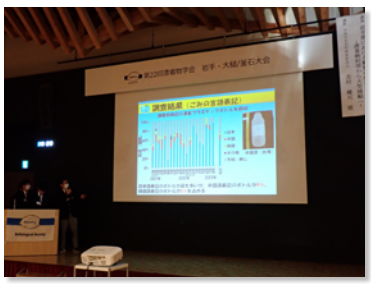
幸いなことに、海と希望の学校の活動を継続していく中で、“地元の海”に興味・関心を持って活動に参加する生徒さんが両地域において増えてきたと感じています。2020年に始まった大槌高校のはま研究会では、活動開始当初、「部活を引退して放課後ヒマになったので来た」といった生徒さんも居て、私はそれはそれで大歓迎だったのですが、今ではは研究会に参加するために大槌高校に入学したという生徒さんも居ます。奄美群島の与論高校では、先輩の研究を引き継いで進めている生徒さんが居ます。その興味・関心を持ち続け、研究者の道に進んでくれたならばとても嬉しいですが、そうでなくても、個々にとっての地元の海の面白さを認識し、他地域とも共有する人材が育ってくれたらいいなと思って日々活動しています。



水のサンプリングと計測を大雨の中で行う与論高校の生徒さん達。役割分担をして、なるべく早く計測を完了させます。



日本地球惑星科学連合2024年大会でポスター発表を行う与論高校の生徒さん。多くの方が発表を聞きに来て、活発な議論がなされました。



第22回漂着物学会で口頭発表を行う大槌高校はま研究会。前年の第21回大会への参加が1つのきっかけで地元大槌/釜石での開催に。

「海と希望の学校」公式 X（@umitokibo）

バックナンバー→ www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）

ぶらり構内ショップの旅

第27回

イスタンブールGINZA@本郷キャンパスの巻

15種類のスパイスを使ったケバブ

理学部1号館にある「ネオポンテTokyo」に出店しているテイクアウト専門店「イスタンブールGINZA」。銀座に店を構える創業1988年の老舗トルコレストランから派生した、ケバブに特化したお店です。

メインのケバブは4種類。ピタパンに鶏肉と野菜が挟まったシンプルな「ケバブ」(¥800)。そしてその2倍の量の肉と、チーズがプラスされた「ケバブデラックス」(¥950)。ピタパンは、美味しいものをアメリカから輸入しています。もちもちとしたトルティーヤで包んだ「ケバブラップ」(¥900)や白米の上にケバブを乗せた「ケバブライス」(¥800、ご飯大盛はプラス¥100)もあります。

店長のフラットさん

秘伝のソースに漬け込んだ鶏もも肉を焼き上げ、その上からクミン、ブラックペッパーなど15種類のスパイスを擦り込んで再び焼いています。本場トルコの味を再現したこのソースとスパイスこそが、美味しさの秘密だと話すのは、店長のフラットさん。ケバブにかけるソースは2種類。ヨーグルトソースはベースのヨーグルトにオリーブオイル、マヨネーズ、ブラックペッパー、ニンニクをミックスした「ヨーグルトソース」。そして唐辛子を使ったピリ辛ソース。お好みで両方かけたり、一種類のみにしたりと選択できます。

ベジタリアンメニューは、ひよこ豆、練りごま、クミンなどをペースト状にしたフムスとピタパンがセットで¥700。フムスは銀座の本店で作ったもの。ドリンクはザクロ、チェリー、アンズジュースの3種類です。(各¥300、食事とセットで¥200)「オープンした時から約5年半、店頭に立ってきました。たくさんの方々に来ていただき嬉しいです。これからもよろしくお願いいたします」

価格は税込み

一番人気のケバブとトルコから輸入したチェリードリンク。
営業時間：11時ー14時半頃(月ー金)。

https://www.w-tokyodo.com/neoponte/neoponte_tokyo/

蔵出し！文書館

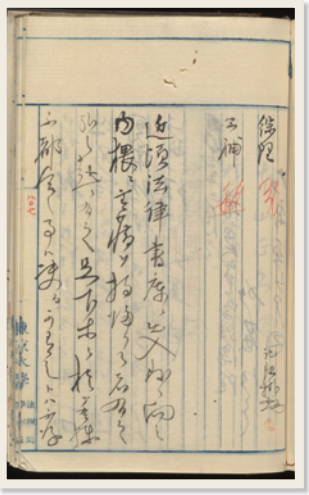
The University of Tokyo Archives

第51回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

法律書庫出禁!?

1881(明治14)年6月9日、加藤弘之綜理から大原鎌三郎・本山正久・大谷木備一郎・宮崎道三郎・目賀田種太郎の5名に宛てて「法律書庫ノ書籍持帰ル者ハ閲覧ヲ禁スルノ件」とする文書が出されました。ん？ 図書館ルールを破る学生を、わざわざ綜理が叱っている？



「諸向往復 明治十四年分二冊之内乙号」(S0004/28)より、文書冒頭部分

が、このお叱りを受けた人たちを調べてみると、一人も東大の学生ではありませんでした。全員、東京大学法学部(目賀田は大学南校)出身ではありますが、このとき大原は東京法学社(法政大学前身)で講師、本山は司法省勤め、大谷木と目賀田は専修学校(専修大学前身)で教鞭を執っています。宮崎は東京大学法学部助教授です。こんな立派な人たちがどうしたことでしょう？

この「諸向往復」という文書群には、省庁や他の学校との間で、鉱物見本や実験機器や図書などを譲りあったり貸借しあったりする文書がたくさん綴られています。そこからは、限られた最新の研究資材を全国規模で融通しあいながら、皆が勢いよく新しい知識を得ていた姿が目に浮かびます。東京法学社や専修学校でも東京大学の蔵書に必要なものがちょくちょくあったのでしょう。

実は、加藤綜理は同じ頃、文部省にかけあって東京物理学講習所(東京理科大学前身)に実験機器を貸し出すための制度整備を行いました。東京大学以外にも高等教育機関をつくり、その支援をすることの必要性は十分理解していたはずです。だからこそ「貸さないわけではないのだから、ちゃんと手続きをとりなさい」と言いたかったのかもしれません。日本の近代高等教育萌芽期の姿が垣間見える文書です。

(准教授　森本祥子)

東京大学文書館
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

ワタシのオシゴト 第219回

RELAY COLUMN

史料編纂所
財務・研究支援チーム
結城舞子

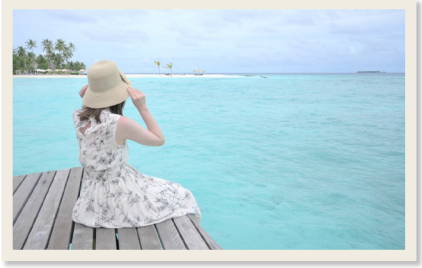
歴史の声に耳を澄ませて

デジタル技術で蘇った100年以上前の古写真と

「史料」と聞くと何を思い浮かべますか？「史料」と一口に言っても公的な書状の他、日記、家系図、地図、古写真、肖像画など多岐にわたることを異動後初めて知りました。史料編纂所は歴史を紐解く手がかりとも言える様々な史料を収集・研究し、編纂及び出版業務を行っています。国内外に調査に赴き、熟練の技術で保存・修理を行い、高い専門性で史料を読み解く。そんな所員の方々の姿に、過去と対話し未来へ歴史を紡いでいく、まるで時をかける冒険者のようなロマンを感じています。

所員の方々が集中できる環境を整えることが私のお仕事で、所全体の決算・外部資金業務から消耗品発注や施設管理まで幅広く担当しています。ある日は和紙や筆の伝票処理から、ある日は史料のデジタル化・データベース化のための高額契約から、本所の伝統と革新の両者を垣間見ることができます。また時には書庫の温湿度を管理する空調の不具合に頭を抱え、歴史と対話する傍で空調機の声（？）に必死に耳を澄ませることもあります。

プライベートはカメラ片手に旅行に出かけるのが好きで、7月にモルディブに行ってきました！目の前に海が広がる光景が忘れられず早くも戻りたいです（泣）。



水上コテージでのんびり♪

得意ワザ：目覚ましのスヌーズを無視し続ける
自分の性格：諦めが悪いタイプ
次回執筆者のご指名：小原和樹さん
次回執筆者との関係：前部署（農）＆人狼ゲーム仲間
次回執筆者の紹介：フットワークの軽い次世代エース

デジタル万華鏡 第41回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

情報システム部 情報基盤課
学術情報チーム係長
田口忠祐

つながる東京大学の学術資産

みなさん、5月末にリニューアルした「東京大学デジタルアーカイブポータル（DAポータル）」はもう利用していただけましたか？ DAポータルは、本学が保有する貴重な学術資産のデジタル画像をインターネットで見られるだけではなく、他のデジタルアーカイブシステムとも連携して、もっと幅広い情報を提供しています。今回はDAポータルが連携する2つのシステムについてご紹介します。

まずは、国立国会図書館が提供するジャパンサーチ（https://jpsearch.go.jp/）との連携です。ジャパンサーチは国内の多様な文化・学術資産コンテンツを検索できるポータルサイトで、国内のデジタルアーカイブの集約点の一つになっています。この連携により、ジャパンサーチで例えば、「森鷗外」で検索すると、DAポータルで提供している森鷗外自筆の写本や森鷗外本人による書き込みがある資料をはじめ、他機関が所蔵する森鷗外に関する様々な資料を見つけることができます。

次に紹介するのは、国文学研究資料館が提供する国書データベース（https://kokusho.nijl.ac.jp/）です。国書データベースは国内の機関と国文学研究資料館が所蔵する古典籍（江戸時代以前の書物）等を集めたポータルサイトで、デジタル画像も提供しています。DAポータルは国書データベースから東京大学所蔵資料のデジタル画像を取得し、他のコレクションと一緒に検索・利用できるようにしています。

DAポータルをはじめ多くのデジタルアーカイブシステムは、国際的に広く使われている枠組みを採用し連携を行っています。このように他のシステムと連携することで、DAポータルは広大な知のネットワークへと進化しています。このネットワークを活用することで、より深く多角的に情報を探索し、新たな発見につなげられるはず。ぜひ使ってみてください！

DAポータルとの連携イメージ

https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/

インタープリターズ・バイブル

第204回

情報学環 教授
科学技術コミュニケーション部門
大島まり

やはり国際学会は現実空間で

先日、私が主として研究活動している計算力学（Computational Mechanics）の国際学会がバンクーバーで開催された。2年ごとに開催される参加者が2000人から3000人の大規模な国際会議である。新型コロナ感染症により、前の2回はオンラインでの開催となったため、6年ぶりの対面開催となった。特に前回の2022年では、開催国である日本の大会組織委員の一人として準備に携わっていて、最後の最後まで対面開催を検討したが、当時の状況からオンラインにせざるを得なかった。それだけに、6年ぶりに研究仲間にリアルで会うことができて、純粋に嬉しかった。オンラインではなかなか難しい詳細なデイスカッションや情報交換ができ、また、新しい出会いもあった。そして、なによりも一緒に食事ができたこと！

このたびの国際学会を通して、6年前からの大きな進歩を実感した。一番ホットな研究トピックスは、仮想（サイバー）空間上に現実（フィジカル）空間と同じ状態・状況の再現を試みるデジタルツインに関連した研究である。デジタルツインの実現や社会実装のためには、現実空間における、例えば製品やそれらに関わる様々な情報を収集し、モデル化してコンピュータ上に再現する必要がある。そのため、機械学習や深層学習などのAIが欠かせない。私自身も専門である血流の数値解析（Computational Hemodynamics）に機械学習を取入れて、医用画像×血流シミュレーション×AIにより、臨床応用を目指している。同じ方向性を目指している研究者たちとも出会えて、今後の面白い研究の展開を感じた。

また、学会で実感したもう一つのことは、参加者のプレゼンの質が向上したこと。ビジュアルがわかりやすく、動画なども駆使してとてもかっこいいプレゼンが見られた。自分のプレゼン資料は、そこはかとなく昭和（!?）を感じてしまう。素晴らしい発表をしている人がいたので、プレゼンで使っているイラストなどはどうやって作っているのかを聞いてみた。答えは、生成AI。自分の考えているイメージを表すキーワードをいれたら書いてくれたとのこと。なるほど。。。

2年後は、ミュンヘン。そのときの研究動向はどうなっているのだろう。研究、がんばろう。

会場は、海が美しいバンクーバー冬季オリンピックの跡地。

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第58回

ディベロップメントオフィス
アソシエイト・ディレクター
二瓶仁志

“ディベロップメントオフィス”に

私が所属する「社会連携本部　渉外部門」は、6月1日より「ディベロップメントオフィス（DO）」という部署名に変わりました。

社会連携本部の一部門であった渉外部門は「東大基金」を運営し、ファンドレイジング（資金調達）を主な活動としていました。それが、同じく社会連携本部にあった「卒業生部門」とひとつにまとまりました。

Development Officeという名称は、非営利団体における資金調達と支援者との関係構築を担う組織を表すものとして、英語圏で一般的に使われています。Developmentには「発展」「拡大」という意味があります。大学の財務力と、卒業生をはじめとするステークホルダーとの関係を発展・拡大させていくことを目指しています。

大学に最も近い卒業生というステークホルダーとの関係を強化することは重要な課題です。卒業生部門はこれまでも校友会と提携し、会員約8万人のオンラインコミュニティ「TFT」による情報発信や、ホームカミングデイの開催などを通じて卒業生とのネットワーク構築を図ってきました。150周年を契機として、さらに多くの卒業生とつながり、理解と連携を深め、大学の教育・研究の発展への寄与に結びつくような関係の構築を目指しています。

2004年に法人化して以来、大学が独自の財源確保に注力することは不可欠になりました。「UTokyo Compass」の目標遂行や、創立150周年に向けた基盤基金「UTokyo NEXT150」の周知と訴求、135種類ある特定プロジェクトへの寄付集め、エンダウメント型財源の強化といった現在取り組んでいる渉外活動に加え、「College of Design」（仮称）の実現に向けた資金調達や、海外からのファンドレイジング施策検討など、新規の活動も増えていくことが予想されます。

DOは150周年という好機をいかし、大学の持つ価値を社会に発信して、ネットワークを拡大します。そして、共感の輪を広げ、財務基盤強化を通じて、東京大学の「新しい大学モデル」づくりに接続する取り組みへより注力していきます。学内のみなさまのご協力をいただく機会もたびたびあるかと存じます。DOをどうぞよろしくお願いいたします。

2024年4月入職の新メンバーです。

トピックス　全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
7月12日	本部渉外課、生産技術研究所	「Full Ocean Depth EX基金」寄付募集を開始
7月16日	医学部附属病院	茂呂徹特任教授が第49回（令和6年度）井上春成賞を受賞
7月16日～	広報室	UTokyo排泄関連トピックス｜80年以上前に収集された麹菌から生まれた甘酒｜牧野富太郎らから託された貴重な植物標本がピンチです／『淡青』48号より
7月17日	本部渉外課	東京大学基金 総長×寄付者ダイアログ 第1回　新たな寄付のかたちで東京大学に託す未来
7月23日	本部環境安全課	令和6年度 総長安全衛生臨時パトロールを実施
7月30日	広報室	宇宙への挑戦――航空宇宙開発と加速する宇宙産業
7月31日	情報学環・学際情報学府	情報学環・NEXCO東日本　第2回渋滞予測チャレンジコンテストを開催
8月1日	附属図書館	附属図書館の蔵書が1,000万冊に到達！
8月2日	本部環境安全課	令和6年度「東京大学安全の日」講演会を開催
8月2日	本部環境安全課	第8回東京大学環境安全衛生スローガンコンテストを実施
8月2日	総合文化研究科・教養学部	森山工教授が第19回日本文化人類学会賞を受賞
8月6日	広報室	東京大学におけるスタートアップ支援／Entrepreneurs 26

CLOSE UP　令和６年度「東京大学安全の日」講演会を開催　（本部環境安全課）

併催された第８回環境安全衛生スローガンコンテストの受賞作品。「まあいいか」に注意です。

本学では、平成17年に構成員が潜水作業中に亡くなる事故が発生した7月4日を「東京大学安全の日」と定め、毎年7月上旬に講演会を実施しています。今年度は7月9日に「リスクのレベルに応じた安全確保」をテーマにハイブリッド形式で開催しました。

第一部では、史料編纂所の榎原雅治名誉教授から、「歴史資料で知る地震・災害と社会」と題して、過去の被害の記録を次の防災に活用することの重要性についてお話しいただきました。続いて、環境安全本部産業医の黒田玲子准教授から、昨年度の事故災害の解説と、過去の事例を活用した職場での転倒防止対策等についてご報告いただきました。

第二部では、工学系研究科の岡本孝司教授から、「グレーデッドアプローチの基本理念と応用における留意点」と題して、安全確保の手法の基本理念や原子力の現場での活用事例を解説いただきました。続いて、ヤマトプロテック株式会社の吉川昭光常任顧問から、「火災の種類、規模に応じた新しい防火設備と機器」と題して、火災の分類や発生メカニズムと、同社が開発した最新の防火設備と機器の事例などを紹介いただきました。

CLOSE UP　渋滞予測チャレンジコンテストをNEXCO東日本と開催　（情報学環・学際情報学府）

2011年に締結した研究協力協定に基づく「データ利活用の取り組みに関する共同研究」の一環としての開催でした。

情報学環とNEXCO東日本は、渋滞予測モデルの精度を競う第2回渋滞予測チャレンジコンテストの最終審査と表彰式を6月27日に開催しました。NEXCO東日本の提供データ（交通量や渋滞の実績データ、ルート検索データ等）を基に渋滞予測モデルを開発し、4月1日～5月6日の間の指定日において、予測と実績の乖離が少ないモデルを構築した上位10名を精度賞の入賞者として決定し、上位3名を表彰。また、データの処理方法やモデリング方針等を定性的に評価し、最も優れた渋滞予測モデルを開発した2名をモデリング賞として表彰しました。コンテストで入賞した渋滞予測モデルを分析し、高度化に取り組むとともに、実用化に向けてデータクレンジングの自動化や社内システムとの連携、高精度でタイムリーな渋滞予測情報の提供について、共同研究を通して検討を進めていきます。

UTokyo　「演習林のおはし」敬老の日の贈り物にいかがでしょうか　UTCCからのお知らせ

UTCCでは、全国７か所にある演習林の木材で作られた「演習林のおはし」を販売中です。森林の管理や調査のために伐採した樹木や倒木を無駄なく活用したお箸は、研究で培った知識や技術を社会へ還元し、社会貢献を目的とするメッセージが込められています。職人の手削りによる自然の風合いを生かしたデザインは、手に馴染みやすく敬老の日の贈り物としても最適です。家族で美味しい食事を楽しみながら、美しい自然の未来に思いを馳せてはいかがでしょうか。（荒）

演習林のおはし（大）（小）　各￥2,400（税込）

北海道（ウダイカンバ）　富士癒しの森（ミズナラ）

退任の挨拶

東京大学のますますの発展に期待

監事　**吉田 民**

2020年9月より4年間、監事として様々な経験をさせていただき、また多くの素晴らしい方々に出会えたことに感謝しております。部局長とのディスカッションや全国の附属施設往査を通じて、教育や研究の現場で行われている様々な活動について理解することができ、本学の活動がとても幅広く、また人類社会の未来のために行われているものであり、まさに公共財として大きな役割を担っていることを実感いたしました。本学にてこのような素晴らしい活動が行われていることは、残念ながら本学を良く知る一部の人にしか理解されておりませんが、これからはこのことを多くの方に知っていただき応援していただくことができるよう、陰ながら尽力できればと思います。

藤井総長の後半3年間は、運営方針会議の設置、国際卓越研究大学への応募、College of Designの設立と、法人化後20年で経験したことのない大きな変革の時期を迎えることと思います。本学の持つ素晴らしいポテンシャルを最大限に活かして、未来の東京大学が多くの人々の集まるますます活性化した大学になるよう、道筋をつけられることを期待しております。

本学のポテンシャルの最大限の発揮に向けて

監事　**棚橋 元**

2020年9月より4年に亘り監事を務め、その間総長を始めとする本部執行部の方々、多くの教職員の皆様に大変お世話になり、心よりお礼を申し上げます。大学の内部から大学全体を見るというのは初めての経験で、新鮮なことばかりでまた多くのことを学び知ることができました。中でも各部局長の方々とのヒアリングなどから卓越した研究内容や研究に注ぐ情熱の一端に触れることができ、これらに基づく本学のポテンシャルの大きさを感じました。ブランド力やスタートアップを取り巻く環境などでも、群を抜く地位にいるのではないかと思います。

他方で、現実には限られたリソースを、その拡張を図りつつもいかに活用して本学全体としてこうしたポテンシャルを最大限発揮し、世界の誰もが来たくなる大学を実現するかが、まさに課題となっていると理解しております。国際卓越研究大学の認定申請、College of Designの設置など「新しい大学モデル」の実現に向け本学の在り方をも変革し得るさまざまな取り組みの最中、退任を迎えるのは残念な面もございますが、今後はこうした取り組みの実現を外から応援し、微力ながらも本学のポテンシャルが最大限発揮されることに貢献できればと思っております。

就任の挨拶

変化に対応する多様な人材育成と研究教育を考えて

執行役

小関敏彦

KOSEKI Toshihiko

昭和56年3月　本学工学部卒業
昭和58年3月　本学工学系研究科修士課程修了
昭和58年4月　新日本製鉄（株）入社
平成6年6月　マサチューセッツ工科大学材料工学博士課程修了（ScD）
平成16年10月　本学工学系研究科教授
平成26年4月　本学副学長
平成29年4月　本学理事・副学長
平成31年4月　日本電産（株）（現ニデック（株））専務執行役員
令和元年6月　京都先端科学大学副学長
令和5年4月　ニデック（株）副社長執行役員・CTO

このたび執行役を拝命し、藤井総長の下でCollege of Designの実現推進に参画することになりました。

濱田総長、五神総長の下で副学長を務めた後、5年間本学を離れましたが、その間、産業界ならびに地方の私大から本学を見て、改めて東京大学の存在と役割の大きさを認識し考える機会ともなりました。また地方私大の国際化を進める中で、世界の大学の教育の変化のスピードと大きさを再認識しました。

そういった経験や認識も踏まえながら、全学の皆様と議論し、関係各位と連携して、社会の変化に対応してリードする多様な人材の育成、東京大学の研究教育の多様化と高度化をどのように進めればよいか、考えていきたいと思います。

皆様のご支援とご協力を宜しくお願いいたします。

第1170回

淡青評論

七徳堂鬼瓦

「言葉の逆風」ポスターを見て

つい先日まで東大構内のいたるところに掲示されていた「言葉の逆風」ポスターには、ジェンダーバイアスを助長するような言葉の例が並んでいる。私もジェンダー・エクイティ推進オフィス員なので一通り目を通し、改めて、自分は幸運にも、ジェンダーバイアスからかなり自由な環境で育ってきたことを自覚し、自戒しなければならないなと思った。

私の両親は大学の同級生だから学歴に差はないし、共働きだったから私自身も子供を産んでも仕事を続けるのが当然だと思ってきた。高校も共学の進学校だったので、女の子も男の子と同じように一生懸命受験勉強するべきとされていた。「女の子はお嫁さんになるんだから勉強しなくていい」なんて昭和の話だと若いころは本気で思っていた。

しかし、15年も大学教員をやっていれば、自分より若い女性研究者から相談を受ける機会がそれなりにある。私が勝手に過去の遺物にしていたジェンダー規範はまだまだ現役であることがだんだんわかってきた。

私が専門とする経済学は、理系並みに女性研究者比率が低い。しかし自分が女性であることによる抵抗を全く感じてこなかったために、どこにハードルがあるのか、私には本気でわからない。しかしなんらかのハードルがあるからこそ女性比率が伸び悩んでいるのだろう。

幸運にもハードルを感じないままキャリアを積むことができた私にできることは、自分が大丈夫だったからと言って他の人も大丈夫とは限らないことを、せめて頭では理解して、現に壁にぶつかっている人の声をきちんと聞くことなのだろう。おそらくは、研究者として生き残ってきた女性には私のようにジェンダー規範をあまり内面化していないタイプが多い。それを自覚したうえで、自分には見えていない壁を取り除くにはどうすればいいか考えていかなければならない。

そうして壁を取り除いていくことで、自分のようにハードルを感じないままで済む若い世代を増やすことに貢献できればいいなと思う。

近藤絢子
（社会科学研究所）

東京大学広報室
no.1585　2024年8月26日

〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課　TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp